

## フライング・ディスク・ゴルフによる 「楽しさ」を導き出す授業の実践 —— 生涯スポーツの視点から ——

個・価値基準・生涯スポーツ・楽しみ

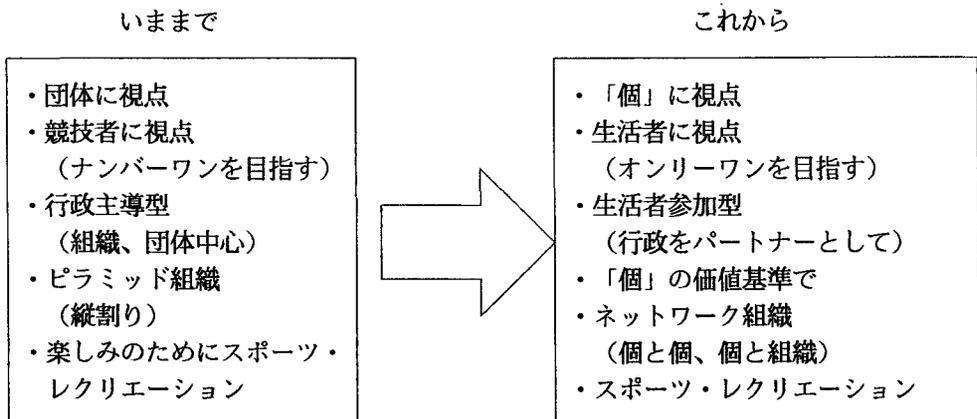
○宮下 桂治(順天堂大学)  
杉本 晴夫(船橋市自遊人協会)  
戸田 安信(船橋市自遊人協会)

### 1. はじめに

1965年、ユネスコで生涯教育が提唱されてから、各大学が保有する施設や設備を開放することから、一般成人が学びやすい聴講生や研究生制度を充実させ、また地域社会に対して公開講座を開く等大学教育を生涯教育のため積極的にすすめてきた。それなのにスポーツ・レクリエーションの生涯教育化は、まだ十分とはいえない。

当大学においては、教員養成を中心にしたカリキュラムのため「学校教育型」で、教育がなされている。

そこで、生涯スポーツの視点からこれまでの「学校教育型」を、「楽しいからスポーツをする」という「生涯スポーツ」の視点にたった状況を作り出すために当実践化へ踏み切ったのである。「学校教育型」とは、教科を教師中心で教師の知識や価値観をもって、一方的に指導するこれまでの学校における一般的手法である。当実践では「いままで」学校教育の現場や地域社会にみられた、スポーツ・レクリエーションの問題を整理し、生涯スポーツ・レクリエーションにおいて「これから」求められる新しい枠組みを設定した。この枠組みに大学の授業を生涯スポーツの視点から組み変えて実践し「楽しさ」を導き出そうとしたものである。



作成：船橋市自遊人協会

図-1 新しい価値観の生涯スポーツ・レクリエーション

## 2. 新しい価値観による生涯スポーツ

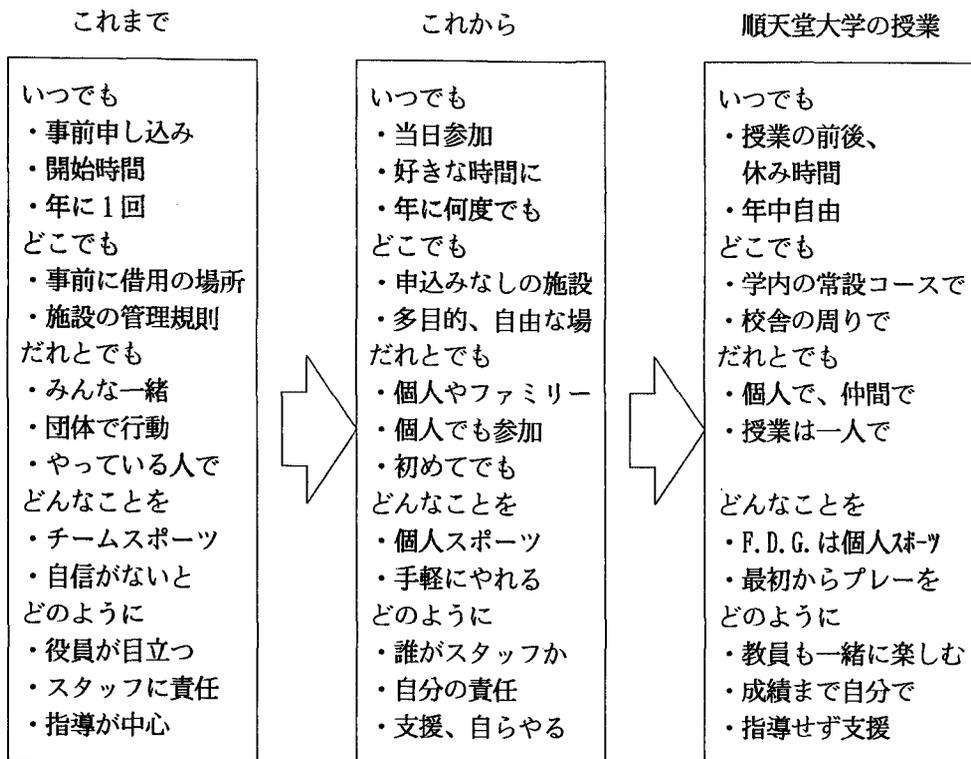
生涯スポーツを展開する基本的な考え方を図-1の様に集約した。

これを実践的に展開する場合は図-2の様にすすめた。

## 3. 実践の枠組み

生涯スポーツの基本的考え方〔図-1、2〕から授業を実践する場合に次の点を配慮した。

- ①自ら楽しむをコンセプトとする。
- ②「個」を基本とし、自らやる授業とする。
- ③課題は与えるが、体験し学ぶは学生とする。
- ④指導から支援に変える。
- ⑤教員も学生と一緒に楽しく。
- ⑥自己評価、教師評価をさせ、自分の成績は自分で評価する。



作成：船橋市自遊人協会

図-2 新しい生涯スポーツの展開とそのポイント

## 4. 教材としたフライング・ディスク・ゴルフの位置づけ

フライング・ディスク・ゴルフは、選択必修科目としてある「レクリエーション・スポ

ーツ」の中の一つ目である。

授業は90分を一コマとし、12コマで1単位を与えている。

実践は1994年の前期に103名の受講者でおこなった。

### 5. 実践の結果

全ての授業を自らやれる様に支援したか90%を越える者が良かったと答え、その理由は「自分にまかせてもらえたから」が最も多かった。〔図-3〕

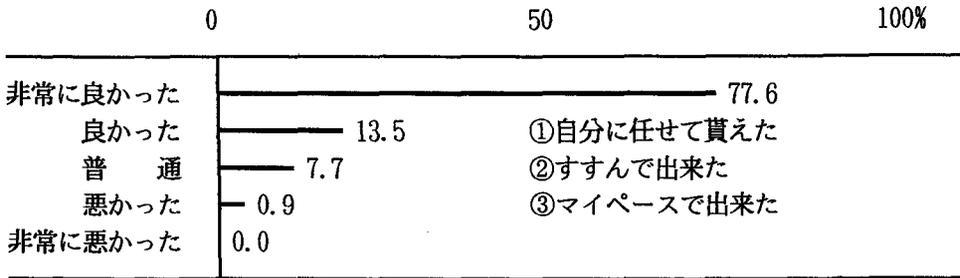


図-3 自らやる授業

N=103

更に積極性についてみると86.4%までが積極的に出来たと答えていることは、教師の知識・技術や価値観による一方的な指導をやめ、支援を中心にし自らやる授業へ変えたことが効果的だったと考えられる。〔図-4〕

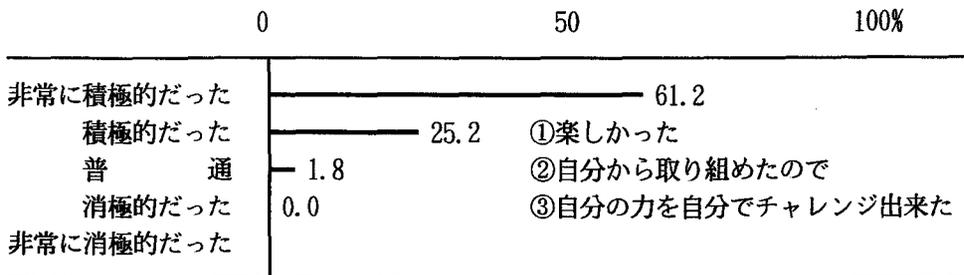


図-4 積極的参加

N=103

フライング・ディスク・ゴルフを体験したその「楽しさ」については約97%の者が楽しかったと答えた。「楽しさ」はスポーツ・レクリエーション活動の最も基本をなすコンセプトであることから生涯スポーツの基本でもある。この実践は「個」に視点をおき、「個」の価値基準で自らすすんでやることを基本にしたが結果として「楽しみ」を導き出すのに大きな影響を与えている。

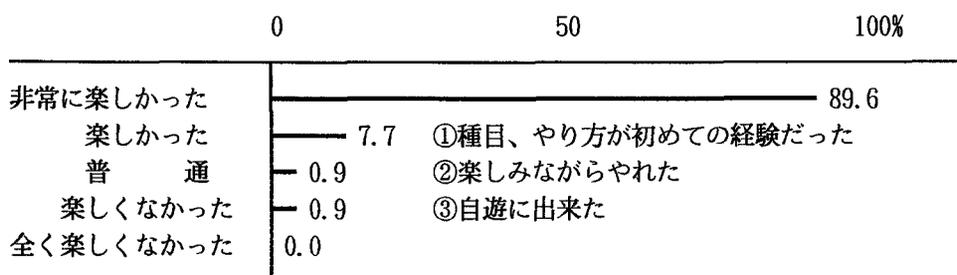


図-5 授業の楽しさ N=103

フライング・ディスク・ゴルフが、生涯スポーツの教材として適格性があるかについての判断では96%以上が適格性を認め、その理由として「一人でも仲間とも出来る」「誰でも出来るスポーツ」「レクリエーション・スポーツとしてよい」等があげられた。まさに生涯スポーツは「個」を基本とする「個のスポーツ」が有効であることも考えられる。

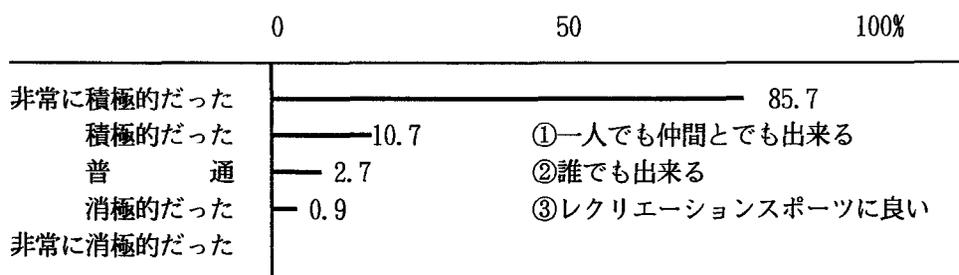


図-6 教材の適格性 N=103

## 6. まとめ

「生涯スポーツ」の基本的考え方を導入して実践したが、「楽しさ」を導き出すことができ、生涯スポーツとして支持され、効果が得られた。